博士学位論文審査要旨

２０１３年7月１７日

論 文 題 目： キリスト教の真理とその現代的普遍妥当性の問題について
— Ｅ・ユンゲル研究における —

学位申請者： 上原　　潔

審 査 委 員：

主　査： 神学研究科　教授　水谷　　誠

副　査： 神学研究科　教授　小原　克博

副　査： 神学研究科　教授　三宅　威仁

要　　旨：

本論文は、カール・バルトとルドルフ・ブルトマンの神学的モチーフの統合を目指しつつ、キリスト教的真理の妥当性ならびに普遍性の問題について取り組んだ、現代ドイツ・ルター派神学を代表するエーバハルト・ユンゲルの組織神学的作業の解明を志したものである。

まず序章で研究史的瞥見がなされ、方法論上の特徴として、主要著作の分析にとどまらず、その都度の社会的、神学的諸課題に関心を向けた諸論文の重要性が指摘される。

第一章では、世俗化された社会状況の中で無神論的主張が自明のものとなり、これをめぐって活発な神学的議論がなされてきた1960～70年代のドイツの神学的状況を取り上げ、当時の神認識の有り様を明るみに出す。そして無神論の萌芽としてのデカルト的近代における自己の問題に言及しつつ、無神論は伝統的な有神論的、形而上学的神認識への批判であることを指摘する。それに対して、聖書における啓示に基づく神学はこの形而上学的神認識と接点を持たず、それゆえに現代的無神論は福音の真理自体への批判とはなっておらず、その妥当性は失われないというユンゲルの理解が明らかにされる。

第二章では、このキリスト教的真理に付与された妥当性がさらに普遍的意義を有するのか否かを課題として、キリスト教的真理の普遍性を合理的に論証することを試みる自然神学に依拠するヴォルフハルト・パネンベルクを中心にした主張に対する1975年頃のユンゲルの批判的視点を明らかにする。そこでは、「信仰に先行する知」がイエス・キリストにおける啓示の出来事を等閑視していること、人間や世界の必然から神の現実存在を証明することは啓示の独自性を凋落させること、また義認論の神学的構造と齟齬を来していることを挙げて、キリスト論的集中に基づく「キリストのみ」という「イエス・キリストと真理の同一視」から展開するユンゲルの啓示神学が明らかにされる。

第三章では、1980年代に、多様な価値観が併存するグローバルな状況下で、キリスト教的真理の普遍妥当性がどのようにその権利を確保することができるかに関心を移したユンゲルを取り上げる。ユンゲルは18世紀末に諸宗教の併存についてパイオニア的示唆を与えたフリードリヒ・シュライアマハーの宗教理論に賛意を示しつつ、キリスト教信仰の普遍妥当性への関心は、必ずしも諸宗教や他の価値の普遍妥当性を拒絶するものではないと主張する。その際にユンゲルが神学的根拠として取り上げるのは三一論の持つ真理の多元性への関心である。つまり、内在的三一論における三つのペルソナの相互協働性、経綸的三一論における人の世界への働きかけにおける神の脱自的な実存性に論及して、キリスト教は互いに相貌を異にする諸存在をそれ自体で端的に承認していることを指摘する。

終章では、多元的社会の中でキリスト教が独自の宗教的実存でありつつ、他の諸価値との協働性を原理的に承認する論理を内に有していることが確認される。

本論文は、ユンゲル神学の特質を普遍妥当性という独自の視点から明らかにした、日本における数少ないユンゲル研究の一つとして、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１３年7月１７日

論 文 題 目： キリスト教の真理とその現代的普遍妥当性の問題について
— Ｅ・ユンゲル研究における —
学位申請者： 上原　　潔
審 査 委 員：
主　査： 神学研究科　教授　水谷　　誠
副　査： 神学研究科　教授　小原　克博
副　査： 神学研究科　教授　三宅　威仁

要　　旨：

上原潔氏は、2004 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たし 2010 年 3 月に退学し、このたび学位論文を提出した。2013 年 7 月 17 日 10 時より 2 時間、神学研究科委員会は総合試験を実施し、上原氏から 20 世紀のプロテスタント組織神学、ならびに当該領域について十分な神学的素養を有することを確認した。本論文に駆使された文献類を見ても明らかなように、ドイツ語と英語の高度な能力を有している。

よって 、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： キリスト教の真理とその現代的普遍妥当性の問題について
——E・ユンゲル研究における——

氏　　名： 上原　潔

要　　旨：

本論文の目的は、現代ドイツ・プロテスタント神学を代表する神学者である E・ユンゲル (Eberhard Jüngel,1934-)の研究を中心に、現代におけるキリスト教の真理が普遍妥当性を持ちうるのかという問題について、一考察をおこなうことにある。

第一章では、キリスト教的真理の「妥当性」の問題に関して考察する。1970 年前後にユンゲルが展開した神認識を巡る議論の背景には、1960 年代前半におけるプロテスタント神学界で活発に論じられた問題、すなわち、現代世界の「世俗化」および「無神論」の問題があった。すでに第一次世界大戦以前から進展し始めていた世俗化の現象は、第二次世界大戦後は加速度的に進展し、無神論は自明のものと看做されるようになる。そのような世俗化した無神論的状況の中でなおも神を語ることができるのか、またそれはいかなる方法でなされるべきか、その場合、そこで語られる神とはいかなるものであり、どのように存在するのかという、極めて基礎的かつ根本的な問いにまで遡って取り組む必要性が生じてきた。

ユンゲルにとって、神は「真理」そのものであり、キリスト教信仰を持つことは、真理としての神を思惟し、認識することに他ならない。ここから、「無神論の上にも現代の神学の上にも同様に、神を思惟することは不可能であるという暗い影が覆っている」現代世界において、「神を再び思惟することを学び取ること」が、キリスト教的真理の妥当性を確保するための課題として浮上してくる。

この課題に直面してユンゲルが採用したのは、彼が師事したカール・バルトのキリスト論的集中の道であり、いわゆる啓示神学であった。この方法の骨子は次のようになっている。すなわち、「有神論」に分類される「伝統的」、あるいは「形而上学的」と形容される神概念と、「キリスト教的」あるいは「福音的」な神概念とを峻別し、近代以降、無神論によって否定されてきた神概念をもっぱら前者に属すものと看做す。ユンゲルの場合、形而上学的な神概念の特徴は、「絶対的優越性」という点にある。近代以降の「主観性の形而上学」、つまり、人間主観がすべての存在者の尺度となる時代を迎えて、伝統的形而上学的な神概念は、その超感性的性格から思惟不可能と看做されるようになる。ところが、少なからず形而上学に支配されているとはいうものの、キリスト教的、福音的な神概念は、形而上学的な神概念とは本質的に異なっている。形而上学的神理解のように、有限的存在者に触れることのない遥か彼方に、静態的に鎮座する神ではなく、有限的存在者に動態的に関わり合うのがキリスト教の神であるとユンゲルは考える。具体的に言うならば、神は我々のもとで、ナザレのイエスというひとりの人間の存在様態において決定的に自己を啓示し、そうすることで初めて、我々が神に近付くことができるようになっている。彼のキリスト教的神理解によれば、神はイエスという具体的な人間において、さらには、形而上学的に見れば神に最もふさわしくない、此岸的な現象と看做される「死」までも引き受けて、我々のもとで、自己を顕したのであるから、主観性の形而上学の時代にあってもなお有効に思惟の対象となり得るのである。このようにユンゲルは、「神の絶対性に関する公理」を批判的に解体し、神概念を再構築することを通して、現代世界におけるキリスト教的真理の妥当性を獲得しようと試みた。

第二章では、こうして獲得された妥当性が、はたして「普遍性」をもちうるのかという問題を

主題として取り上げた。本論文では、この問題を巡るユンゲルの論考を、1975 年を中心として展開された自然神学との対論を瞥見することで詳らかにした。ユンゲルは、キリスト教的真理が有する普遍性の問題に極めて強い関心を抱いているが、当時、ドイツ・プロテスタント神学において復興の兆しを見せていた自然神学には批判的である。自然神学の中心問題もまた、キリスト教的真理の普遍性を合理的に論証することにあるために、その問題設定は正当なものとして受け止められるが、それにもかかわらず、自然神学には、方法論的な側面にも神学的内容の側面にも問題があるとされる。

方法論的な側面においては、自然神学の方法論には首尾一貫性が欠けているという批判が向けられる。つまり、自然神学は、特殊な信仰を前提とせずに、神を神から離れて思惟することが可能だと主張しているが、実際には、論証の過程において何らかの特殊な信仰が前提とされており、循環論法に陥っているということである。他方で、神学的内容の側面では、次の三点に批判が向けられる。すなわち、第一点目としては、「信仰に先行する知」というパネンベルクの知性重視志向は、啓示の「出来事」の出来事性を等閑視することにつながる。第二点目としては、人間や世界の必然から神の現実存在を証明しようとする試みは、神の存在の「独自性」を凋落させることにつながる。第三点目としては、「自然的神認識という意味における自然神学の原理化」は、義認論が持っている神学構造の基礎的性格を揺るがせにする恐れがある。

こうした自然神学の試みに対して、ユンゲルはキリスト教的真理の普遍性を、キリスト論的集中の道を辿ることで確保しようと試みる。このユンゲルの方法論の核となっているのは、「イエス・キリストと真理との同一視」と、神はイエスという「一人」の人間において「万人」に妥当する真理を啓示したという、「キリストのみ」という「排他的条項」である。神は真理そのものであり、その神がイエス・キリストにおいて自己を万人に向けて決定的に啓示したのであるから、その出来事にもとづくキリスト教的真理も、それだけで端的に真と看做されるべきものである。ユンゲルは、キリスト教的真理の妥当性の問題とその普遍妥当性の問題を、それぞれ切り離して別個に考察するのではなく、前者の問題解決の際に得られた成果から、後者の解決策を内的に導き出す。すなわち、「キリスト教の真理をただその内的な力によってのみ、一般的妥当性において、唯一の真理として明らかにする」のである。

ところで、1970 年代を中心としたユンゲル神学は、1980 年代中盤に入ると、その関心の重点を徐々に移行させてゆく。その背景となっているのは、1980 年代の東西冷戦の緩和と、西欧世界であらわになっていた文化的背景を異にする他者との平和的共存を巡る問題である。1970 年代の諸著作の中心的な関心が、世俗化した無神論的世界におけるキリスト教的真理の普遍妥当性にあったとするならば、1980 年代中盤以降のユンゲルの関心は、多元的社会の到来を迎えた現代世界において、キリスト教的真理の普遍妥当性をどのように主張するのかという問題に向かっていった。

この問題に直面して、ユンゲルが提案した解決策の要諦は、真理概念の再解釈であり、それをハイデッガーの哲学を援用しつつ、三位一体論を通して展開したことにある。

ユンゲルやハイデッガーの真理概念の理解において最も重要となるのは、真理を伝統的な「一致」という性格を出発点として考察しないということである。一致としての真理をよりいっそう根源的に観察するならば、そうした真理は、一致するための複数の存在者の存在を前提としていることが分かる。要するに、一致としての真理が成り立つにためには、個々の諸事物が前もって「分裂／中断」された状態で、「明るみの場」へと呼び出されていなければならない。このような真理を、ユンゲルは「中断としての真理」と名付けた。こうした存在論的な意味合いを持つ「中断としての真理」は、キリスト教的に説明される。例えば、光と闇をはじめとする諸々の「区別」を通して万物が創造されたという創造論、あらゆる存在者が「中断」されながら、相互に益をもたらす関係にある始原的状態としての聖書的平和概念などであり、そこからは、最終的に、存在することを「中断」されつつも「共にあること」あるいは「結びつきのうちにあること」と考え

る存在論が導き出される。

ユンゲルがこのように真理概念を再解釈するのは、次の事柄を強調するためである。すなわち、個々の存在者は、絶対的に措定された方向性やある一つの規範に、固定化された形であらかじめ規定されているのではない。そうではなく、本来的かつ始原的には、それぞれの存在者の存在が、それ自体で端的に承認されている。そして、その存在を端的に承認された個々の存在者は、相互に益をなす状態でお互いの存在を承認し合う。換言するならば、統一する原理あるいは真理が個々の存在者に先立って存在するのではなく、個々の存在者が独立を保ちつつ、相互に益をなす状態で連関していることがユンゲルの述べる真理概念の内容なのである。

その際、こうしたキリスト教的真理の模範として引き合いに出されるのが、三位一体の神である。キリスト教の神は、決して孤独な一者ではなく、それ自身の内に独立した他者、つまり、父、子、聖霊という三つのペルソナを有した三位一体の神である。神におけるそれらの他者は、相互に益をなす関係の内に調和している。これは内在的三位一体論における真理であるが、経綸的三位一体論においても、神は真理であるということができる。つまり、自身とは質的に異なる他者、すなわち人間や世界と歴史を共有し共存するために、神は人間の側へと脱自的に実存し続ける。そのために神は自身を「引き裂き」、常に人間や世界へと自己を献与するのであり、そうした意味において、神は真理そのものなのである。

このようにしてユンゲルは、今日の多元的社会の中で、他の真理を排他的に退けることなく、キリスト教的真理の普遍妥当性を主張しようと試みたのであった。